

廣瀬さんと天文学史

藪 内 清

今年(1981)の10月初めに廣瀬さんの新著『天文学史の試み』が送られてきた。さっそく御礼といくらかのコメントを立川市のお宅に書き送った。ところがそれに対する返事が山梨県の清里から送られてきて、入院後の経過がはかばかしくない旨が書かれていた。私は廣瀬さんが清里に家を持っていることも、また入院されたことも知らなかった。奇妙といっはおかしいが、その葉書に清里のお宅の電話番号が書かれていた。さっそく電話をかけてみると、肺炎の余後がはかばかしくなく、野外に出られない状態だということだったが、お声はなかなかしっかりしていて、何だか心配がないような気がした。清里は寒かろうから早く立川に帰って静養されるようにと電話を切ったが、これが廣瀬さんとの最後になった。

廣瀬さんとの交友はずいぶん長い。1926年秋のころ、京大宇宙物理学教室の1年生であった私たちは山本一清教授に引率されて流星群の観測のため姫路高校に赴き一夜を明かした。同校の1年生で寄宿舎にいた廣瀬さんに会ったが、後年、私自身はすっかり忘れてしまっていた。記憶のよい廣瀬さんはよくおぼえておられ、何かの時にこの話が出た。私のアルバムをひっくりかえしてみると、寄宿舎で写した少年廣瀬さんの写真があったので、記念に差上げたことがあった。廣瀬さんは東大天文学科に進まれ、しばらく会う機会はなかったが、戦後には学会会議の天文研究連絡委員会などでよくお目にかかるようになった。ことに親しくなったのは天文学用語委員会であって、ここでは廣瀬さんが委員長として、私も委員の1人として参加した。委員長としての廣瀬さんの手腕は大したもの、実にてきぱきと問題を処理された。後に東京天文台長として活躍されたのも当然であった。Planetを惑星と訳すか遊星とするかは、東大と京大との長い懸案であり、かなり時間をかけて論議し、結局惑星に落付いたのである。

位置天文学の大家であった廣瀬さんは、1960年のころから次第に天文学史の研究に時間を割かれるようになった。東大にも京大にも天文学史研究の伝統がある。京大では新城新蔵先生が中国天文学史の研究をはじめられ、これに対し東大では平山清次先生が日本曆法史の研究を行われ、つづいて神田茂氏が日本天文観測史の資料整理上大きな業績を挙げられた。神田さんとともに彗星や小惑星の観測を行っておられた廣瀬さんが、やがて日本天文学史に関心を持たれるようになったのは、いわば自然の成行きであったかも知れない。廣瀬さんは日本天文学

史に関する研究を論文や著書の形で精力的に発表されるようになり、私はいろいろな形でその恩恵を受けるようになった。1963年夏には富山県新湊市に現存する江戸時代の数学者石黒信由の高樹文庫を会場にして、廣瀬さんと元の授時曆の研究会を行ったのも楽しい思い出であった。授時曆は唐の宣明曆と並んで、日本に關係の深い曆法である。しかし暑かった夏のこの会合には悲しい思い出がある。参加者の1人であった前山仁郎さんが新湊からの帰途に急逝されたことである。前山さんは廣瀬さんが天文学史の後継者として期待された学者であった。その後、廣瀬さんは内田正男さんに天文学史の研究をすすめられ、内田さんはその期待には応え、『日本曆日原典』の大著を完成された。この内田さんも近く停年を迎えられることになったが、ぜひとも東京天文台に天文学史研究の伝統を残してほしいものである。

廣瀬さんは冒頭にあげた『天文学史の試み』のほか、『日本人の天文観』(1972)、『年・月・日の天文学』(1973)、『望遠鏡』、『太陽・月・星と日本人』(1979)など多くの著書を発表された。このほか編集されたものに『曆』(1974)、校注解説を施されたものに岩波日本思想大系本の『二儀略説』、『星学手簡』抄(1971)、『遠西観象図説』(1972)などがある。これら多くの著述の中、代表作の1つである『年・月・日の天文学』についていえば、それがきわめて軽妙な筆で書かれていることである。題名からして面白い。落語の文句を受けて「いま何時だい?へい九ツで」という題名で江戸時代の時刻制を論じている。「改曆の沙汰も金次第」という題名で江戸時代に行われた改曆の舞台裏を論じている。幕府が主導者となった貞享改曆にあたって、幕府から千石の米を朝廷に送って準備工作をした話は、私はこの書物で始めて知った。廣瀬さんは表面に出た歴史とともに、歴史の裏に隠された人情の機微に深い関心があったようだ。『天文学史の試み』では、輝やかな業績の裏に、その成功を支えた人物とその仕事に焦点をあてたと書かれているが、廣瀬さんのゆかしい人柄がそのまま出ている著書といえよう。何れの著書も軽いタッチで書かれているが、きわめて内容の濃いもので、他書にはみられない記述が多く、その博識ぶりがうかがわれる。

研究論文にもすぐれたものが多いが、ここでは中国曆に関するものについて簡単にふれておこう。1968年の『東京天文台報』に発表された宣明曆に関する研究は内田さんとの共著で、後に内田さんがコンピューターで宣

明暦が日本で施行された時代の暦日を計算される基礎となったものである。授時暦に関しては同じく1969年の『東京天文台報』に発表されたものがあり、関孝和の授時暦研究を中心とした研究で、関孝和のこの研究が和算史の上で重要な意味を持つことを注目された重要な論文である。授時暦について思い出すのは、達藤利貞『日本数学史』に朝鮮の学者容螺山が日本人に授時暦を教えたとい

う記事がある。私は容が学者の姓であると思っていたところ、『通航一覽』64の寛永20年朝鮮使随員の中に「進士安期、号螺山」とあるのによって、容は客の誤りであることを、廣瀬さんから教えられた。多くの点でご教示を受け、今後も長い交友をと思っていた廣瀬さんを失い寂寥の念一人である。ご冥福を祈る。合掌。

(1981.11.19)

廣瀬さんを憶う

清水 彊

廣瀬さんにはここ数年来お目にかかる機会がない儘に過ぎてきたが、私の記憶の中のお姿はいつも元気そのものであり、俄かに幽明を異にすることとなろうとは、全く思いも及ばぬことであった。茲に、編集者からの求めに応じて、廣瀬さんを偲ぶ私の思い出の一端を記してみよう。

私の大学入学は昭和6年であるが、その時廣瀬さんは後期(3年)学生であった。当時の天文学教室は麻布狸穴の旧東京天文台跡であったから、廣瀬さんとの出会いもここからである。今では全く姿を消した手廻しのモノロー計算器を動かし、彗星か小惑星かの軌道計算を精力的にやっていた頃の廣瀬さんが、今もなお目に浮ぶ。その計算器のあった学生控室の奥が平山清次先生の研究室であったから、廣瀬さんは計算器の騒音を慮り、計算は殆ど夜間に取組まれ、徹夜も屢々であったらしい。計算が苦手であった頃の私には、このような廣瀬さんは大きな驚きであった。

廣瀬さんは大学卒業後、神田茂氏の下でわが国の天文学史料の蒐集に当られた。その間の経緯は存じ上げないが、このことが晩年の天文学史研究の基盤となったと思われる。三鷹の天文台に勤務されたのは、ブラッシャー天体写真機係りとしてであり、及川奥郎氏を助けて小惑星や彗星の観測に専念された。相前後して、当時の天文台長関口鯉吉先生の下で26吋赤道儀係の1員となった私は、5ヶ年間天文台で廣瀬さんと親しくお付合い戴けることになった。その間の思い出の1つは、関口先生が私に命ぜられたので、廣瀬さんの援助を得て試みたブラッシャー写真乾板による恒星固有運動の測定である。それには、同一写野を年数を隔てて撮影した新旧2板の乾板を膜面接密にして測定することが望ましいので、廣瀬さんには出来るだけ古い損傷のない乾板の選定と、同一写野での膜面裏返し撮影とをお願いしたのだった。測定の結果については、当時の天文台報に報じたので省略しておく。

昭和23年になって、廣瀬さんはわが国における月の掩蔽観測や子午環観測の結果が、世界一般のそれと系統

的な差違が見出されるのは、わが国の測地原点が持つ垂直線偏差の影響であると推論された。そして、同年5月9日に起るであろう金環食の中心線の位置には、上記偏差に相当する修正が必要と提唱された。礼文島における当日の金環食はほぼ廣瀬さんの予報位置に見られ、その推論の妥当性が実証された。この研究が廣瀬さんの学位論文となったと思う。

その後昭和31年になって、廣瀬さんは更に前述の天文観測の結果から、わが国の測地座標の基準であるベッセル地球楕円体への補正値を誘導された。そして、以前に熱海氏や川畑氏などが発表されていた同じ補正値は、その符号が間違っていることに気付かれ、私にもその確認を求められた。早速調べてみると正に指摘の通りであった。この符号の誤りについては、廣瀬さんの原論文を読んだ人達には周知であったが、昭和49年に古在氏との連名で測地学会誌に再指摘をされている。

廣瀬さんの天文台長就任は昭和38年4月から同43年11月までであるが、その間直接助言を戴いたのは、恒星天文学研究会(SAM)の人達の間で、わが国でも大型シュミット望遠鏡による観測的研究を進めるべきだとして、昭和40年来討議を重ねてきたその設置計画についてである。廣瀬さんは、東京天文台でも大型シュミット望遠鏡の建造が年次計画としてあるので、SAM案が現実的で天文台案に調整ができれば、その設置の実現は期待できるし、また実現後に共同利用への開放も可能であろうから尽力する、と示唆されたのであった。東京天文台の口径105 ㎝のシュミット望遠鏡が木曾観測所に建造されたのは、昭和49年10月であって、その間天文台長は古畑正秋氏を経て、大沢清輝氏に代っていたが、いずれもSAMの討議への理解を戴くことができ、共同利用に開放されている。

廣瀬さんとの最後の関わりは昨年である。私の天文台時代にダンジョン・クーデの Lunettes et Télescopes を丸善で買求めたが、天体観測者にとって参考になる事柄が記述されているので、廣瀬さんにもお見せした。この